

深瀬泰且

奥山虎章については、昨年四月の日本医史学会例会においてその事跡を発表した(その抄録は本誌四一巻三号に収載されている)ので、本總會ではかれが編纂した英和医語辞典『医語類聚』と、そのさいに参考にしたダングリソンの医学事典 *Medical Lexicon* について報告する。

『医語類聚』初版は、明治六年に出版された。その例言に「頃者専就動氏医学字書摘其英採其華聚為一小冊子」とあって、本書が「動氏」の医学事典について編纂されたものであることをのべている。英文の序文の「It is principally compiled from Dunglison's *Medical Dictionary*」によって、さきの「動氏」がダングリソンであることをあきらかにしている。五年後の明治十一年に増訂第二版が出版された。

明治初年のわが国の医学は、オランダ医学の退潮したあとをうけて、主流はむしろ英米医学であった。英語の医学書がかなり広範囲に利用されていたことは、阿知波五郎をはじめおおくの先学によって指摘されている。『医語類聚』は当時の医師や医学生によって、ひろく活用されていたにちがいない。

奥山は半井成質とともに海軍病院でのエドウィン・ホイラーの解剖学講義を翻訳して、『講筵筆記』として明治四年九月に出版した。この翻訳にあたって適切な訳語をもとめて、奥山らはかなりの苦心をしいられていたと考えられる。これが『医語類聚』編纂の一つの契機になったといえよう。

奥山が参考にしたダングリソンの辞書とは、*A New Dictionary of Medical Science and Literature*——第二版から *Medical Lexicon* にあらためられた——である。一八三三年にアメリカ最初の医学事典として、ボストンのチャールズ・ブラウン社から二分冊で出版された。第一八版(一八七四年)は子息のリチャードによって改訂され、第二三版(一九〇三年)はトマス・ステッドマンによ

つて改訂の手がくわえられて、本書は終焉をむかえた。

なお一九一一年にはステッドマン自身の編纂になる『*Practical Medical Dictionary*』が出版され、これが昨年第二六版が出版された、いわゆるステッドマンの医学辞書である。

両書を比較してみると『医語類聚』（初版）三二〇ページにたいし、ダングリソン事典（一八七四年版）一一三三ページと、およそ三倍の分厚さであるので、奥山がすべての語彙を採録したのではないのはあきらかである。その和文も奥山は二―三行におさめているに比し、ダングリソンの解説は半ページにおよぶ長文もある。奥山がダングリソンのどの版を参看したかをあきらかにすることはできないが、採録すべき語彙を選定するために参照した書物といえよう。

ダングリソンの事典編纂の目的は、その第二版の序文によると「単なる単語の辞書とするのではなく、それぞれの語彙について医学的な関連を要約した解釈をあたえることであり、それによって医学全般の状況についての概要をのべることにある」という。かれは語学の才にた

けていたのでラテン語、ギリシア語ばかりでなく、ドイツ語やフランス語の広範にわたる同義語をあげている。さらに手短な伝記的記述や書誌学的記載もふくまれている。

ロブリー・ダングリソン（一七九八―一八六九）はイングランドのケスウィックに生まれ、エディンバラ大学を卒業した。トマス・ジェファースンがヴァージニア大学を創設するにあたって、ダングリソンはその招請をうけて一八二五年アメリカにわたって教授に就任した。一八三三年メリーランド大学教授、一八三六年からはジェファースン医科大学教授に就任して三三年間その地位にあった。解剖学、薬物学、外科学、生理学のほか、医学の講義もおこなっている。

レスリー・モートンによると「ダングリソンはイギリス生まれのアメリカでの最初のフルタイムの教授。生理学教科書、医学辞典、医史学の最初の著者」であるという。多作な学者で、その著作はすべてあわせると一二万五千部におよんでいる。

（順天堂大学医学部医史学研究室）